



英米文学エピソード事典

定価1,600円

昭和63年4月15日 第1刷発行



検印省略

|       |              |
|-------|--------------|
| 著者    | ロバート・ヘンドリクソン |
| 訳者    | 横山徳爾         |
| 発行者   | 株式会社北星堂書店    |
|       | 代表者 山本雅三     |
| 印刷・製本 | 住友出版印刷(株)    |

発行所 株式会社 北星堂書店

東京都千代田区神田神保町1-46  
〒101 振替口座 東京 8-16024  
電話 (03) 294-3301 (代表)

◆ 落丁・乱丁本はお取替いたします

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社の承諾をえてください。

ISBN4-590-00805-X

## 英米文学エピソード事典



# 英米文学エピソード事典

ロバート・ヘンドリクソン

横山徳爾 訳

(朝日イブニングニュース社版)

北星堂書店

此为试读, 需要完整PDF请访问: [www.ertongbook.com](http://www.ertongbook.com)

The Literary Life and Other Curiosities  
© Robert Hendrickson, 1981  
Japanese translation rights arranged with  
Viking Penguin Inc., New York through  
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

本文装幀 熊沢正人



## まえがき

読者の皆様が私と同様に本書を楽しんで下さることを期待しています。執筆に約5年を費やしましたが、愉快的ことに、この本をどのように分類してよいのか、いまだに確信が持てません。ただ、文学的人生のあらゆる側面を取り扱っていますから、書物と言葉を愛する方々のための本、といえましょう。

この方面の書物で有名なものとしては、ディズレイリ (Isaac Disraeli) の『文学エピソード集成』 (*Curiosities of Literature*)、ブルアー (E. C. Brewer) の『故事成句辞典』 (*Dictionary of Phrase and Fable*)、ウィリアム・ウォルシュ (William Shepard Walsh) の『文学エピソード必携』 (*A Handy-Book of Literary Curiosities*) などがあります。これらは、分類不可能な知識を集成した書物として、とくに著名なものです。

試みに、本書の頁を適当に繰ってみても、作家の執筆上の習慣や日常生活をはじめ、殺害された作家、殺人者であった批評家、史上最高の原稿料を支払われた作家、飢死寸前の作家、文学者の愛人関係、作家の不幸な結婚、運動好きな作家、アル中の作家、大食漢の作家、気違い詩人、多作の作家、速

書きの作家をめぐるエピソードから、作家の異常な最期、作家の最後の言葉に至る話題がみられます。無数のエピソードがあるわけですが、私はこれらをトピックスごとに関連づけ、エッセイ風にまとめることによって、この書物に文学エピソードコレクションとしての充実した内容だけでなく、それ以上の意味を持たせたいと努力しました。

最後に、過去と現在の多数の作家たちに謝意を表したいと思います。本の虫である読者の方々(あるいは書物寸断機)がこの本を齧るよりも前に、この本のために私自身が虫食いの状態になって、精根尽き果ててしまうことになったかも知れないのです。それは、ほかならぬ過去と現在の多数の作家たちのせいなのです。これらすべての作家たちの名前を挙げるスペースはありません。本書のなかのたったひとつの項目でさえ、長年の調査の過程で、あるいは、啓発的であり、また興味深いと判断したエピソードを拾い集めた年月を通じて、私が参照した20数冊の書物から得た成果であることが多いからです。

ニューヨーク市ファー・ロカウェイにて  
ロバート・ヘンドリクソン



まえがき

## 第1章 書くこと＝その行為とその芸術 ————— 11

*Writing : The Act & the Art*

●名文家の文体をまねる ●執筆のためのウォーミング・アップ ●刺激を与えてくれる習慣 ●孤独と執筆 ●作家の筆跡 ●鼻で書く ●事故で失なわれた原稿 ●「悪魔」亭へ行こう——文学的居酒屋 ●居酒屋「人魚」亭に捧げる詩 ●文学者のカクテル・パーティ ●三文文士たち ●ポットボーラー ●「ネルは死んでしまったの？」 ●文学作品の長い胚胎期間 ●ユージーン・オニールと原稿のカット ●行き過ぎた取材

## 第2章 文学的人生＝作家と著述家 ————— 25

*The Literary Life : Writers & Authors*

●文学的の神童たち ●成熟と風味 ●最も多作な作家は匿名作家 ●速書きの作家たち ●文筆によって生計を立てた最初の婦人 ●気前のよい作家たち ●学歴のない大作家たち ●文学者の愛人関係 ●文学者の結婚生活 ●運動好きな作家たち ●政治家やスパイ兼業の文豪たち ●大食漢の文豪たち ●アル中作家 ●共同執筆した文学者たち ●ゴースト・ライター ●獄に下った文学者たち ●ペンネーム ●最も献身的な伝記作者 ●作家の署名 ●シェイクスピアの署名 ●有名な文学者の最後の言葉 ●異常な最期 ●文学者ゆかりの墓地 ●文学作品に登場する有名墓地 ●ハーディの心臓

## 第3章 詩人とへば詩人 ————— 91

### *Poets & Poetasters*

●詩人は天賦の才能●詩的許容●詩人は白鳥●桂冠詩人●アメリカ各州の桂冠詩人●博覧強記の詩人●眠れる詩人を起こすな●『ポルトガル語からのソネット』●模造品のギリシャ壺に寄せるオード●「気違い詩人」●詩人と音楽●雅称を得た詩人たち●詩から名前をとった作者●イギリス最大の肥満漢詩人●「わけも理由もない」●団栗の背競べ●無削除版童謡 ●メアリーはほんとうに小羊を持っていた●詩人墓所●議論の決着●墓から取り戻された詩

## 第4章 機知に富む才人、ジョーク愛好者、そして老獺な文学者 ————— 119

### *Wits, Wags, & Literary Weasels*

●簡潔は分別の精髓●眠りの国●最初のジョーク・ブック●栗の老樹●シェイクスピア、リチャード・バーベッジ、そして女友達●ジョン・ウィルクスの機知●ワイルドの機知●シヨ一流の機知●マイズナー流洒落●パーカー流の洒落●ビッカースターフのいたずら●嫉妬深い食わせ者の文人●ロウリー詩の偽作●O. ヘンリーの短篇の前半

---

## 第5章 批評家、検閲官、不穩当個所削除訂正者、 そして焚書家 ————— 141

*Critics, Censors, Bowdlerizers, & Book Burners*

●作家たちよ、酷評を受けよ●いつも書きなぐっているのだね、ギボン君●『チャタレイ卿夫人の恋人』の書評●吹聴●卑劣漢カール●検閲滑稽史●禁書目録●悪魔派●ボルノ雑誌編集者の反撃●焚書——そして焚殺された著者

## 第6章 書物と誇大宣伝文句について ————— 167

*Of Books & Blurbs*

●書物狂●初期刊本●すべてが載っている本●ジョンソン博士の辞書●ウェブスターの辞典●一冊の書物を記念する最も長時間の催し●暦●見かけだけの安物●白い女神の呪い●不採用通知票をめぐる記録●誇大宣伝文

## 第7章 芸術は人生を模倣する、そして逆もまた同じ 185

*Art Imitates Life & Vice Versa*

●ロマン・ア・クレフ●不思議の国から出たアリス●ジーキル博士とハイド氏●シャーロック・ホームズ●真説ロビンソン・クルーソー●アンクル・リーマス●イギリス最初のピグマリオン●念入りな調査●エクディジアスト●お世辞●マンボー・ジャンボー●ホレイショー・アルジャー物語●アナクロニズム●アンティクライマックス●ズボンをはいた本●史上最悪の食後のスピーチ●孔雀●おえら方、不承知だ

---

訳者あとがき ————— 210

索引《本書に登場する作家たち》————— 213

♣本書は朝日イブニングニュース社版『素顔の作家たち—英米文学  
エピソード・コレクション』を改題したものです。

第 / 章

書くこと

その行為とその芸術



*Writing: The Act & the Art*

## 名文家の文体をまねる

*Play the Sedulous Ape*

ロバート・ルイス・スティーヴンソンは、ある魅力的なエッセイで「名文家の文体をまねる」(play the sedulous ape)という句を初めて用いた。「私は、ハズリット、ラム、ワーズワス、サー・トマス・ブラウン、デフォー、ホーソーン、モンテニユ、ボードレール、そしてオーベルマンの文体をせっせとまねて書いた——それこそが、好むと好まないにかかわらず、名文を書けるようになる方法である」。sedulousはラテン語 *sedulus* (注意深い) に由来し、努力または注意力の点で、たゆまず頑張ることを意味する。そこでこの句は、創意が全く見られない模倣者を評する時に使われる。

## 執筆のためのウォーミング・アップ

*Warming Up*

スタンダールは語っている。「『パルムの僧院』(*La Chartreuse de Parme*)を書いていた時、私は、正確な雰囲気を把握するために、毎朝、民法典を2、3ページ読んだ」。ウィラ・キャザーは、聖書の一節を読まないと執筆を開始できなかった。ベネット・サーフは、トイレで坐っている時に最高の着想を得た。ヘミングウェイは、鉛筆を10本位削ってからでないと立ち上がって書くことができなかった(飛行機事故で背骨を痛めて以来、立ったままで執筆していた。また、タイプライターは対話の部分にしか使わなかった)。ルイス・キャロルとヴァージニア・ウルフも立ったままで書いた。ポーは、詩を

書く前にシャム猫を肩にのせた。トマス・ウルフは、長い散歩をしてから書き始めた。バルザックは、まずブラックコーヒーを飲まねばならなかった。1日の仕事を始める前に、かなり強い朝酒（eye-opener）を一杯やらなければならなかった作家は古今に数多い。キップリングは、執筆用の黒インクがないと書き始めることができなかった。彼は書いている。

「私には真<sup>↑</sup>黒なインクが必要である。私は一度父の家を訪れたことがあるが、もしそこにずっと住んでいたのであれば、墨を磨<sup>↑</sup>らせるために墨磨りの少年をそばにおいただろう。

<sup>ブルー・ブラック</sup>濃紺の黒は、私が忌み嫌うものである。私の書き物机は、私が極めて贅沢に使っている青味がかかった白い大きな紙の、一定のサイズに合わせた特別製であった」。ハーヴィ・アレンは、横になりさえすれば、先祖たちの声が彼に向かって口述してくれる、と言っている。トルーマン・カポーティは、「完全に水平志向の作家」と自称し、横になっていないと考えることも書くこともできないが（執筆時のこの姿勢は、マーク・トウェインとロバート・ルイス・ステイーヴンソンも好んだ）、彼もまた特別の色（黄色）の用紙を必要とする作家である。ところが、黄色のバラが部屋にあるのは我慢できない、と言う。ジャックリーヌ・スーザンは、草稿を、黄、青、ピンク、そして最後には白い用紙にタイプした。アレクサンドル・デュマ・ペールは、ノンフィクションはバラ色の用紙に、小説は青い用紙に、詩は黄色い用紙に書いたが、そうしないのは言語道断と考えた。彼は、自分で書く時も、またしばしば助手に雇った代作者と共作する時も、この用紙の色の使い分けは常に厳守した。デュマは、ナポレオンの第一帝政時代の白黒混血<sup>↑</sup>の將軍の息子であり、不眠症患者であった。医者は、

毎朝7時に凱旋門の下で1日1個リングを食べることを命じたが、これによってデュマが規則正しい起床と睡眠の習慣を身につけることを期待したのである。

ディズレイリは、小説執筆中に夜会服を着用したが、ジョージ・M. コーハンにはウォーミング・アップのためのこの上なく高価な習慣があった。しばしばプルマン・カーの特別客車全体を借り切って、取りかかっている仕事を終えるまで移動を続けるのであった。この方法で、コーハンは一晩に140ページを書き上げることができた。

ヘンリック・イプセンの執筆の習慣は、奇妙極まりないのであった。机から見て上の方に掛かっているアウグスト・ストリンドベリの肖像画を眺めて奮起した。イプセンは言っている。「彼は私の不倶戴天の敵だから、私が執筆する間、そこにぶら下がり眺めさせてやるのだ」。





## 刺激を与えてくれる習慣

*Stimulating Habits*

サック酒(sack)、すなわちシェリー酒は、シェイクスピアの好物の酒であったと思われる。彼は戯曲のなかで、他のぶどう酒を合計したよりも頻繁にサック酒に言及しているからである。

アレグザンダー・ポープは、濃いコーヒーを好んだが、バルザックほどではなかった。バルザックは、少なくとも1日に50杯の濃いコーヒーを飲んだ。ジョンソン博士は、一度に25杯のお茶を飲んだが、それによる身体への悪い影響は、別になかった。

ディズレイリは、シャンペン・ジェリーの、パイロンは、水割りジンの愛好家だったが、トマス・ホップズは、冷たい水以上に強い飲物の必要を、一切感じなかった。

ドイツの詩人シラーは、机の引き出しにしまってあるリングの匂いに恍惚となったが、彼はまた「シャンペンを混ぜたコーヒーで頭脳を刺激した」。

アメリカの詩人エイミー・ローエルは、葉巻を喫した史上ただひとりの女流詩人であろう。1915年に、戦争による品不足を心配して、愛用ブランドのマニラ煙草を1万本買い込んだ。もうひとり、上等の葉巻を好んだ女流作家にジョルジュ・サンドがいる。